

長崎県2つ目の世界遺産が誕生 ～構成資産のある地域の取組みとその活用～

はじめに

長崎県の世界遺産には、2015年に登録された『明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業』を構成する23の資産のうち、端島炭鉱（軍艦島）をはじめ8つの構成資産がある。さらに、今年（2018年）6月末、『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』が世界遺産に登録されたことで、その12ある構成資産のうち、11資産が加わることになった。これにより、長崎県は全国でも数少ない複数の世界遺産がある都道府県となった。

そこで本稿では、この新たな世界遺産『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』の構成資産のなかから「原城跡」、「黒島の集落」、「平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳）」、「平戸の聖地と集落（中江ノ島）」における地域の取組み状況を報告するとともに、その活用について考察する。

I. 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産

長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産（以下、「潜伏キリシタン関連遺産」と呼称）は、16世紀にキリスト教が日本に伝来した後、江戸幕府による禁教政策のなかで、長崎と天草地方において密かにキリスト教信仰を継続しつつ、社会や他宗教と共生し、独特の伝統を育んでいった潜伏キリシタンの文化を物語るものである。

同資産は、日本にキリスト教が伝来し、宣教師が活動した初期の時代から、キリスト教及び入植者が禁教により迫害を受けた時代、そして禁教が解かれカトリックの信仰が復活した時代までを段階的に表している。



九州旅ネット「九州の世界遺産」より

Ⅱ. 増える教会見学者

今回、世界遺産となった『潜伏キリシタン関連遺産』の旧称は「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」といい、その名が表す通りいくつかの構成資産には教会が主たる施設として存在している。それらの教会（長崎市を代表する観光地・大浦天主堂を除く）の来場者数を前年度比でみると、2016年2月に政府が国連教育科学文化機関（ユネスコ）への世界遺産推薦を一旦取り下げた影響からか、出津教会堂に近い「大野教会堂」（長崎市）と、2016年12月～2017年8月上旬まで保存修復工事が行われていた五島列島・奈留島の「江上天主堂」がともに前年度を下回ったものの、その他の教会はいずれも前年度実績を上回っている。なかでも、交通の便が決して良いとは言えない五島列島・久賀島にある「旧五輪教会堂」は、2017年度には2014年度に比べて約15倍と群を抜いている（図表1）。

図表1 教会への来場者数

(人、%)

教会	年 度	2014	2015	2016	2017	対 比	
						2017-2016	2017-2014
出津教会堂		15,062	21,367	25,602	27,297	106.6	181.2
大野教会堂		534	3,715	4,669	4,327	92.7	810.3
黒島天主堂		1,816	4,037	4,238	4,310	101.7	237.3
旧五輪教会堂		480	6,190	7,126	7,173	100.7	1494.4
江上天主堂		2,809	9,457	7,394	6,104	82.6	217.3
頭ヶ島天主堂		6,141	25,686	26,872	36,501	135.8	594.4
旧野首教会		1,701	3,062	2,856	3,286	115.1	193.2
崎津教会（熊本県）		61,471	85,668	78,746	83,986	106.7	136.6
田平天主堂		38,751	65,273	65,860	70,802	107.5	182.7

※資料提供：長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産インフォメーションセンター

(注) 構成資産外教会

(注) モニターツアー等より算出した参考値含む

また、ユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議（イコモス）が、ユネスコに対し「世界文化遺産への登録が適当」と勧告した、いわゆる“世界遺産への登録勧告”が出た今年5月の状況を4月と比べてみると、各教会とも軒並み増えており、佐世保市の離島・黒島にある黒島天主堂は前月比2倍以上となった。そして、教会守^{もり}*が不在となったために同月7日以降のデータがない江上天主堂にも、わずか6日間で4月実績の半数以上の人々が訪問している（図表2）。

図表2 2018年5月の各教会来場者数

(人、%)

教会	年 月	2018年4月	2018年5月	前月比
大浦天主堂		29,218	43,567	149.1
出津教会堂		2,619	3,551	135.6
大野教会堂		396	786	198.5
黒島天主堂		372	748	201.1
旧五輪教会堂		574	872	151.9
江上天主堂		742	378	50.9
頭ヶ島天主堂		2,591	4,838	186.7
旧野首教会		305	438	143.6
崎津教会（熊本県）		7,697	14,808	192.4
田平天主堂		6,858	8,749	127.6

※資料提供：長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産インフォメーションセンター

(注) 構成資産外教会

(注) 5/7～教会守不在。以降の来場者不明

※教会守：「祈る信者の側で騒がしく見学する」、「教会の物が勝手に持ち去られる」など、観光客が引きおこす諸問題に対して、教会を見守る役割を担う。なお、長崎観光のメッカ、大浦天主堂には職員を配置。

Ⅲ. 教会見学者対策

2014年4月に設立された教会見学者の受け入れを担う任意団体『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産インフォメーションセンター』（宮脇雅俊会長）は、増加する教会見学者対策として、前出の教会守を地元自治体の協力のもと、2014年7月の「出津教会堂」と「田平天主堂」を皮切りに各教会に随時配置して見学者へのマナー啓発を行ってきている。ところが、信者数の減少から教会守の人選が難しくなっていることに加え、殆どが70歳代となるなど、高齢化が進行している。なかでも、特に離島は厳しく、江上天主堂には教会守がいなくなってしまった^{注1)}（図表3）。

さらに、当センターは教会見学の事前連絡受付業務も担っており、【図表3】のうち、小値賀町野崎島にある「旧野首教会」を除く8つの教会を担当している（旧野首教会は、地元・小値賀町の観光組織「おぢかアイランドツーリズム」が担当）。

教会見学の事前連絡システムは、教会観光がミサなど信者の日常生活の妨げにならないよう、一度に多人数の見学者が重ならないよう設けられたものである。しかし、無人島・野崎島にあるために連絡が必須となる旧野首教会と、有人島だが五島の二次離島^{注2)}・久賀島にあり、さらに、その島内でも辺境地区にある「旧五輪教会堂」を除くと、他の教会への事前連絡率は今一步の状況である（図表4）。また、その連絡はツアー客など団体客からが殆どであり、個人からは少ない。

注1) 江上天主堂は、7月1日より地元の信徒が複数で対応している。

注2) 二次離島：本土と間に直接交通手段がある島を“一次離島”、ない島は“二次離島”と呼ばれている。

図表3 各教会の『教会守』配置状況 (人)

	2016年	2018年5月現在
出津教会堂	3	4
大野教会堂	3 (うち、1人は出津教会堂兼務)	2
黒島天主堂	2	2
旧五輪教会堂	1	1
江上天主堂	1	調整中
頭ヶ島天主堂	1	1
旧野首教会	1	1
崎津教会（熊本県）	6	6
田平天主堂	2	2
計	19	19

※資料提供：長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産インフォメーションセンター

(注) 構成資産外教会



長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産
インフォメーションセンター（出島ワーフ2階）

図表4 各教会への見学事前連絡率

(人、%)

	2015年10月～2016年3月			2016年度			2017年度			前年度比 (2017-2016)
	来場者数	(うち、 連絡者)	事前 連絡率	来場者数	(うち、 連絡者)	事前 連絡率	来場者数	(うち、 連絡者)	事前 連絡率	
出津教会堂	11,355	8,088	71.2	25,602	14,394	56.2	27,297	15,204	55.7	▲0.5
大野教会堂	2,078	1,404	67.6	4,669	2,630	56.3	4,327	2,075	48.0	▲8.3
黒島天主堂	1,843	680	36.9	4,238	1,728	40.8	4,310	1,450	33.6	▲7.2
旧五輪教会堂	4,220	4,220	100.0	7,126	6,978	97.9	7,173	7,173	100.0	2.1
江上天主堂	3,973	3,385	85.2	7,394	5,507	74.5	6,104	3,993	65.4	▲9.1
頭ヶ島天主堂	9,791	7,025	71.7	26,872	12,982	48.3	36,501	14,692	40.3	▲8.0
旧野首教会	1,593	1,593	100.0	2,856	2,856	100.0	3,286	3,286	100.0	0.0
崎津教会(熊本県)	37,046	2,060	5.6	78,746	9,419	12.0	83,986	13,315	15.9	3.9
田平天主堂	33,799	15,357	45.4	65,860	18,885	28.7	70,802	13,642	19.3	▲9.4

※資料提供：長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産インフォメーションセンター

(注) 構成資産外教会

(注) モニターツアー等より算出した参考値含む

(注) 教会守不在日あり(総数把握できない場合あり)

次に、世界遺産への“登録勧告”が出た今年5月の状況をみると、旧五輪教会堂と旧野首教会に加え、五島・奈留島の「江上天主堂」と、同じく五島の頭ヶ島（二次離島だが、1981年に隣接する一次離島・中通島との間に架橋された）にある「頭ヶ島天主堂」の事前連絡率は100%となった。これは、“離島”という立地が大きく関係していると思われ、個人客が比較的安易に立ち寄ることのできる他の教会（黒島天主堂は佐世保市の離島・黒島にあるが、フェリーで50分と渡航しやすい）への事前連絡率は未だに低い（図表5）。

なお、崎津教会は熊本県の世界遺産ということもあり、多くの見学者が訪れている反面、事前連絡率が最も低い。これは、熊本県の世界遺産見学を長崎県に事前連絡しなければならないというシステムが、まだ認知されていないためと推察できる。そのため事前連絡率を上げるためには、インフォメーションセンターが、教会見学の事前連絡先が同所であることをツアーを企画する旅行会社などに対して再度確認を取るか、崎津集落の地元組織に教会見学の事前連絡受付業務を委

図表5 2018年5月の教会見学事前連絡率

(人、%)

	2018年4月			2018年5月			前月比
	来場者数	うち連絡者	事前連絡率	来場者数	うち連絡者	事前連絡率	
出津教会堂	2,619	1,360	51.9	3,551	1,704	48.0	▲3.9
大野教会堂	396	117	29.5	786	275	35.0	5.5
黒島天主堂	372	107	28.8	748	238	31.8	3.0
旧五輪教会堂	574	574	100.0	872	872	100.0	0.0
江上天主堂	742	704	94.9	378	378	100.0	5.1
頭ヶ島天主堂	2,591	2,591	100.0	4,838	4,838	100.0	0.0
旧野首教会	305	305	100.0	438	438	100.0	0.0
崎津教会(熊本県)	7,697	1,027	13.3	14,808	1,830	12.4	▲0.9
田平天主堂	6,858	996	14.5	8,749	1,408	16.1	1.6

※資料提供：長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産インフォメーションセンター

(注) 構成資産外教会

(注) 5/7～教会守不在。以降の来場者不明

託して、後日報告を受けるなどの対策を取らない限り、事前連絡率の低迷は続くものと思われる。

Ⅳ．構成資産のある地域の動き

1. 原城跡

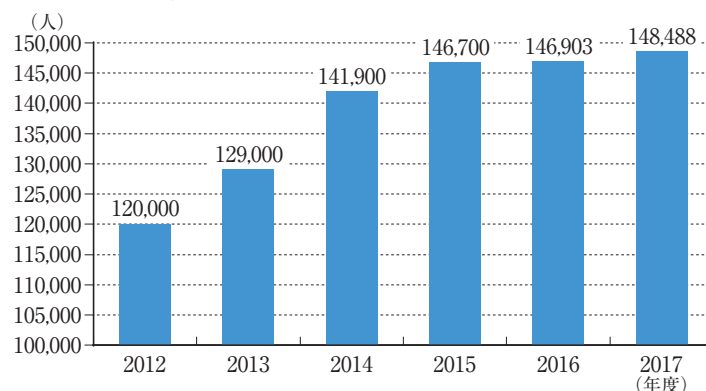
(1) 来場者数

原城跡を訪れる人は増加傾向にあるものの、2014年度に14万人台となって以来、2017年度まで15万人手前で足踏み状態となっている（図表6）。

（一社）南島原ひまわり観光協会の内山哲利会長によると、通常のGW期における観光客の動きは、雲仙や島原市内が中心となっており、原城跡まで足を運ぶ人は少なかった。ところが、

世界遺産登録勧告が出た今年のGWは、勧告当日の5月4日が753人、翌5日は862人と2日間で1,600人以上の人が訪れており、現在も週末には250～300人が来場しているとのことである。

図表6 原城跡への来場者数



（一社）南島原ひまわり観光協会からの資料を基に当研究所にて作成

(2) 来場者の受け入れ準備

①観光ガイド

原城跡では現在、土日祝日は南島原ガイドの会「有馬の郷」のガイドが4人常駐しており、ワンコインガイド（高校生以上1人当たり500円。案内時間は1時間程度）を行っている。なお、世界文化遺産への登録が正式決定した翌日の7月1日に訪れた約300人の見学者をはじめ、同月7日までは登録記念として無料ガイドを行い、期間中に146人を案内した。



観光協会会長 兼 観光ガイドの内山氏

②駐車場の確保

駐車場については、南島原市が原城跡に沿った国道端のガソリンスタンド跡に大型バス5台、普通車10台以上が駐車可能で、トイレも併設した新駐車場を2017年秋に設置。またことは別に、同時期にこれも原城跡に近接している温泉保養宿泊施設「原城温泉真砂^{まさご}」に、普通車50台分の駐車場を新たに整備して、これまでと合わせて70台分を確保するなど、世界遺産登録を見据えた整

備を進めてきている。

③その他の取組み

- 電動自転車を原城温泉真砂と、島原・天草一揆の状況などを展示している「有馬キリシタン遺産記念館」に10台ずつ、計20台を配備。なお、利用料は無料。
- 原城跡の新たなグッズとして、2017年5月から原城に関わるものをモチーフにデザインされた手ぬぐいを5種類作成し、有馬キリシタン遺産記念館にて1枚800円にて販売。昨年度は、世界遺産の登録前ながらも販売実績が300枚を超えた。また、原城跡でも販売しており、その際には特製缶バッジをつけて1枚1,000円にて販売、5種類まとめて買っていく観光客も現れはじめている。
- 今年8月以降、VR技術を用いた原城跡のバーチャル体験が可能なタブレット端末を、有馬キリシタン遺産記念館か、原城温泉真砂に配備する予定。



原 城 跡

(3) 課題など

①ガイド関連

a. 利用者の低迷

遠方からの観光客はワンコインガイドを利用するが、県内など近隣から訪れた人や家族、グループの利用が少ない。1,600人を超える訪問者があった今年5月4、5日の両日でも利用者数は計75人と訪問者の5%に満たず、その後の週末も1日あたり20人前後の利用にとどまる。来訪者にはガイド側から積極的に声掛けを行っているが、断られることが多くガイドの方もストレスが溜まるという、悪循環に陥っている。なかでも家族連れからの謝絶が多く、ガイドの会「有馬の郷」では、例えば家族連れ6人で3,000円になる（1人500円×6人）現行料金体系を見直し、10人まで2,000円、20人まで3,000円などと人数ではなく、グループ単位の料金体系に見直すことも検討されている。

b. ガイドの減少と高齢化

有馬の郷の登録ガイドは、2016年当時90人を超えていたが、2018年現在50人まで減少しており、うち、実働可能なガイドは30人未満と少ない。また、その平均年齢は74歳と高齢化も進んでいる。これについては、市内の農漁業体験民泊受け入れ家庭のなかから若手が2名ガイドデビューする予定であり、また、同じ市内でも原城跡から少し遠い旧深江町や島原半島の入口にある自治体・諫早市の在住者から、原城への興味が高じてガイドを希望する人が現れるなど、厳しいなかにも

光明がみえている。

c. 難しいガイドの育成

今回世界遺産となった構成資産のなかで、教会のような施設がある資産のガイドは比較的行いやすいが、原城跡には話す施設など何もなくそのガイドには工夫が求められる。これに対応できる力量を持つガイドの育成は難しい。

②駐車場からのアクセス

新たに整備された駐車場から原城本丸跡までは徒歩15分と少し離れている。加えて、週末には本丸近くの駐車場の利用を禁止することから、観光客は歩かざるを得ず、お年寄りが多い団体ツアー客などにはかなり厳しい。この対策の1つにシャトルバスの運行などが考えられるが、城内に通じる道は非常に狭く、バスの往復運行には時間がかかることが予想され、来訪者が多い場合には、バスを待つよりも歩いたほうが早いという逆転現象が起きる可能性もある。

③物販施設や休憩所の整備

国道端に新たに整備された駐車場に近接して、ガイダンス機能を備えた物産館を建設する計画があるものの、当該地が世界遺産のバッファゾーン（緩衝地帯）に当たることから、景観を阻害しないような外観デザインなどの計画表を国などに提出し、検証を行いながら事を進めなければならない、直ぐには整備できない。

また、原城跡はその名の通り城跡で何もなく、天候次第で見学には過酷な場所となる。駐車場から歩くにしても、城内に途中休憩できる場所がない。しかしながら“世界遺産”という冠が付く以上、来訪者のおもてなしは考えるべきであり、それにはある程度の利便性も求められる。城内には、せめて雨宿りができるくらいの休憩所や真夏の暑さと真冬の寒さを凌げる施設を最低限設けておくべき、との声も聞かれる。



南島原ガイドの会「有馬の郷」の佐藤会長とガイドのみなさん

2. 黒島の集落

(1) 観光客数

黒島を訪れる人の数は、2015年度に黒島天主堂が世界遺産になるのでは、との期待から急激に増えて4千人台となった。以降、2016年2月の世界遺産への推薦取り下げを経て、関西や福岡方面を中心とした団体客が引き続き訪れたことにより、2017年度まで4千人台をキープしながら少しずつ増加している（図表7）。また、本年度も4月と5月の2カ月間で既に1,100人以上が訪れた。

さらに、島に3軒ある旅館・民宿の宿泊状況を尋ねると、2018年6月現在はビジネス客が中心となっているものの、夏休みにかけては一般からの予約で既にほぼ満室とのことである。

(2) 来島者の受け入れ準備

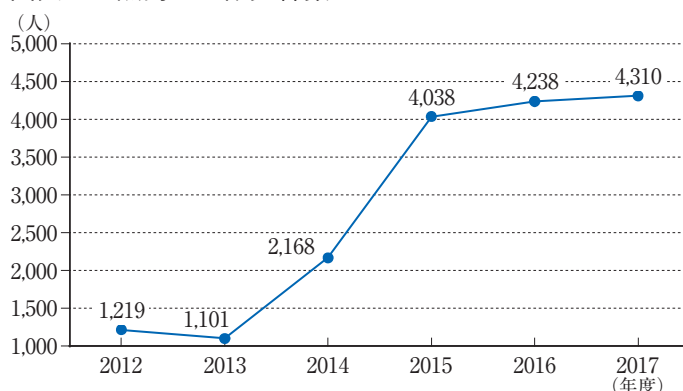
①観光拠点施設の開設

- 2016年4月に本格稼働した「黒島ウエルカムハウス」は、NPO法人黒島観光協会（山内一成理事長）が入居しており、電動自転車の貸し出しを行うなど、黒島の集落を訪れる人の拠点施設である。
- ハウスでは、島内産のものや島外に依頼して作ったものなどを島の新たな土産品として販売しており、これまでのふくれまんじゅうと豆腐という、日持ちしない商品しかなかった黒島のお土産が一気にバラエティに富むものとなった。そのため、島民も島外に住む子供や親戚のために、これらの新たな土産品を送付しようと当ハウスを訪れている。
- 販売商品のうち、およそ4割は島内産で占められている。島内産のものはジャガイモや玉ねぎに代表される地元の農産物や海産物に加え、オリジナルの人形や携帯ストラップなど、観光協会の会員自らがアイデアを出し、材料費も負担して製作したものである。外注品は観光協会のスタッフが島外へ出かけて交渉・製作してもらったものを置いている。島内産・外注品ともに委託販売形式を採用しており、観光協会が販売手数料として売上の2割を徴収する。

②観光コーディネート組織

NPO法人黒島観光協会は、前身の島民有志による地域おこし組織「黒島史跡保存会」から発展して、2014年にNPOの認証を受けた黒島観光の中心組織である。同協会は、スタッフが旅行業の免許を取得したことで旅行業者の登録も受けており、食事やガイドの手配が可能となった。現在提供しているガイドコースは、史跡保存会時代から取り組んでいた、島内観光1日コースと半日コース、ふくれまんじゅうや豆腐づくり体験コースなどをブラッシュアップしたものである。

図表7 黒島への観光客数



NPO法人黒島観光協会からの資料を基に当研究所にて作成



黒島ウエルカムハウス

③観光ガイド

黒島の観光ガイドは現在17名（2016年当時は14名）で、うち実働可能人数は10名前後。年2回ガイド養成講座を開催しており、その際使用するテキストは観光協会の山内理事長監修のもと、（公財）佐世保観光コンベンション協会が2017年3月に作成した“黒島観光ガイドテキスト”を用いており、ガイド全員が黒島に関する知識を共有できるようにしている。

④無料シャトルバスを運行

黒島観光協会では、佐世保市からの委託という形で5月の週末とGW期間中に、公共交通機関のない島内に無料シャトルバスを走らせてみた。その結果、約250人の利用があり好評を得たことから、世界遺産に正式登録された6月30日～8月末までの毎週末も引き続き運行している。また、その利用者にはアンケートを行い、得られた結果を今後の観光政策に反映する計画である。

⑤乗船客の把握と昼食手配、島への受け入れ人数の調整

フェリー乗船客の属性把握は、観光協会の重要な仕事の1つである。ところが、観光客とビジネス客、島民の区別がつくのは島の住民、しかもある程度年齢が上の人でないと見分けがつかない。そこで、週末は山内理事長自身も黒島発のフェリー初便に乗船して佐世保・相浦港まで赴き乗船客のチェックを行っている。また、その際には次の2つの任務を兼ねている。

- a. 島では食事する場所が少ない上に、黒島名物「島めし」は、前日までに予約が必要となっている。そこで観

光協会のスタッフは、相浦港発のフェリー初便に乗船する観光客へ一声かけており、もし昼食を準備していない人がいれば、島の素材で作った弁当の手配を島に連絡、黒島港にて手渡しするなど、おもてなしを充実させている。

- b. 黒島と高島（黒島へ渡航する途中に立ち寄る島）の島民が優先乗船となるフェリーでは、乗船人数が100人と限りがあるために、日帰りを計画している観光客の積み残しが発生する恐れもある。そこで、観光協会では船を運航する黒島旅客船（有）と連携して双方で乗



黒島観光ガイドテキスト



黒島天主堂

船客のチェックを行い、積載許容範囲オーバーと判断した場合には、観光客の乗船を断る役目も担っている。

また、この理由から黒島には1カ月に最大3,000人しか訪れることができない。もっとも、この制約のおかげでガイドや食など、観光客のニーズに対応できるという一面もある。

(3) 課題など

①利用が少ない「漁船クルージング」コース

観光協会主催の漁船による黒島1周クルージングには、12人乗りの船を2隻登録しているが、観光コースのなかで最も需要が少ない。

このコースへの申し込みが今一步なのには、次の2つの理由が考えられる。1つは、黒島への観光客は日帰りがほとんどであり、島内観光を終えてからのクルージングは日帰り客には時間的に厳しいこと。もう1つは、1時間を超える黒島一周は、黒島から佐世保・相浦港までの距離と大差なく、燃料費の高騰から料金が高止まりしていることにある（本コースの利用料は1隻2万円。相浦港から黒島までの漁船チャーター料金も2万円）。

②少ない観光協会の会員数

黒島観光協会の会員数は、2016年当時の55人から2018年6月現在83人と増加しているものの、400人を超える島民がいることを考えるとまだ少なく、しかも、会員のほとんどは70歳以上の女性で占められていることから、地域おこしを兼ねている組織としてもっと多くの島民が協会活動に参加することが望ましい。加えて、島には少ない比較的若い男性の参加も望まれる。

③地元産品の拡充

黒島ウエルカムハウスに置いてある地元産の商品を増やすために、観光協会では会員に対してウエルカムハウスは島の活性化の拠点であり、自分たちできるものをどんどん作ってここで販売するように、といつも呼びかけている。そうでないと、ハウス内の販売品が島外品ばかりとなり、お土産に黒島の特徴が出なくなってしまう。会員がもっと地元のよりよいお土産品を作っていくことが理想である。



ウエルカムハウスの内部

④天主堂の保存修理期間中の対応

黒島天主堂は、今年11月から2020年10月までの間、耐震補強を含む保存修理工事に入る。その間、天主堂は囲いに覆われる状態が続くこととなり、内部は2年間立ち入り禁止となる。この間の観光客対策として、内部は近接する資料館のモニターで見てもらう予定であるが、外観をどう

するのかまだ決まっていない。そこで、同じ世界遺産の姫路城の改修時のように、天主堂の外側に設けられる櫓を利用して外から工事の様子を見てもらうことも考えられているが、危険が伴うとの意見もあり、その実行には工夫と慎重さが求められる。

3. 平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳、中江ノ島）

（1）来場者数

平戸市にある構成資産のうち、潜伏キリシタンの聖地である「中江ノ島」は、普段上陸できないことから訪問者のカウントはない。また、もう1つの「春日集落」も観光地ではなく、潜伏キリシタンの歴史が今に残る現役の集落であることから、これまで訪問者をカウントすることはなかった。

そうしたなか、春日集落に世界遺産登録を控えて集落の案内所ができた結果、4月は220人、登録勧告が出た5月には1,200人が同所を訪れており、また梅雨入りした6月にも4月の3倍となる668人の人が立ち寄っている。平戸市の文化交流課によると、平日は20～30人、週末になると50～60人が同所を訪れているとのことである。

（2）来場者の受け入れ準備

①春日集落の案内所

春日集落案内所「かたりな」は、平戸市が空き家を活用して整備し、今年4月にオープンした地域の情報発信拠点施設である。施設の愛称“かたりな”は、全国から集まった400点を超す応募のなかから同年6月に決定した。

同施設では、キリシタン弾圧と潜伏信仰、集落の歴史を紹介するビデオ放映と関連資料の展示があるほか、特産品の売店があり、電動アシスト自転車も5台常備、4時間500円で貸し出している。



春日集落案内所「かたりな」

この施設最大の特徴は、地元住民のおばあちゃん数人が集落の語り部として常駐し、訪れた人に対して、自らがつくった漬物やかんころもちなどをお茶と一緒に提供してもてなすことにある。この取り組みは、観光客からも集落の住民と直接触れ合うことができると大変好評を得た。おばあちゃんたちはいわゆるボランティアではなく、「かたりな」の指定管理者である（一社）平戸観光協会が雇用しており、8人が交替でその任に当たる。また、売店では平戸の特産品とともに、集落で栽培した米や、その米を用いた日本酒、住民手造りのラッキョウなどを販売している。

②聖地「中江ノ島」の観光

上陸できない中江ノ島の観光について、平戸市の文化交流課は、近くの生月島にあるビュースポットの1つ「黒瀬の辻殉教地（ガスバル様）」からの眺めを薦めており、同地に島の案内板を設けることにしている。一方、民間では生月島で船を所有している人のなかに、島の周囲を回るクルージングに取り組む動きも見受けられる。



中 江 ノ 島

また、かくれキリシタンに関する資料が常設展示されている生月島の「生月町博物館・島の館」では、中江ノ島のことだけではなく、春日集落と安満岳、生月の潜伏キリシタン全体にまつわる詳細な話を聞くことが可能であり、同文化交流課はガイド的な話を聞きたい観光客にはこの博物館に立ち寄って解説を受けることを提案している。このことから「島の館」は平戸にある構成資産の世界遺産センター的な役割を担う施設であるともいえる。

③世界遺産を中心とした周遊コースの設定

平戸市における民間の動きでは、湯快リゾートグループに所属するホテル蘭風が、福岡空港と福岡駅から伊万里経由にて平戸までのバスを毎日走らせており、さらに、市内でも土曜日を除く毎日、世界遺産を巡る定期観光バスを運行している。このツアーのガイドを担当しているNPO法人平戸観光ウエルカムガイドの籠手田恵夫理事長は「湯快リゾートからの依頼が増えており、かなり好調のようだ。全国に展開しているグループの発信力はやはり強力であると実感している」と語る。

また、平戸市もこの2つの世界遺産を中心に市内にある複数のキリスト教関連遺産を巡るドライブコースマップを作製しており、市内の主要箇所に常備している。

福岡から平戸までのバスツアー

（3）課題など

①象徴的なものがない難しい世界遺産

『潜伏キリシタン関連遺産』の12の構成資産のなかで、1つは上陸できない島、もう1つは訪れること、登山することは可能だが、教会など象徴するものがない集落と山であるという平戸の構成資産は、訪れる人にその価値を説明・理解してもらうことが難しい世界遺産の1つであろう。しかしながら、潜伏キリシタンの頃の風景が色濃く残るこれらの資産は、価値を見出せる人にとっては大変奥深いものになるに違いない。今後この2つの資産をどう一般に知ってもらうのかが大きな課題となる。



春日集落



安満岳（中央。頂上に岩が見える山）

②ガイドの質の維持

2つの構成資産のガイドは、ある意味原城跡以上に難しい。平戸の場合、資産単体の説明だけでは相手も理解不足になることから、キリシタン史以外の説明も加えていかなければならず、ガイドもかなりの力量が求められる。そういった意味では、平戸では世界遺産専門ガイドを育成する必要はないものの、平戸全体を語ることでできるガイドを育成しなければならず、学ぶ範囲が広いためにガイドの質を保つことが難しい。

③地元産商品の拡充

春日集落案内所「かたりな」では、地元・春日産の商品を増やしていきたいとしているが、地区の人口は60人程と少なく、働き手が少ない。そこで、平戸市では地元の原材料をもとにした加工品を外部委託して製作できないか検討しており、世界遺産登録により地元の人が潤うことで、少しでも集落の維持に貢献したいとしている。

③二次交通の問題

平戸の周遊に公共交通機関の利用は難しく、レンタカーなど自前の交通手段がないと厳しい。ウエルカムガイドの籠手田理事長も「個人客で平戸まで公共交通機関で来て、市内における交通

手段がない人の対応に苦慮している」と語る。

平戸の世界遺産は市の中心地から距離があり、観光して帰ってくるためには最低でも3時間、余裕を持つためには4時間かかることから、シャトルバスによるピストン輸送も、1日の運行回数が非常に少なくなり、費用対効果からも困難となる。

V. 世界遺産の保護と活用

世界遺産に登録された資産には、その保存と維持管理義務が生じる。遺産の価値に影響が及ぶような現状変更行為があると、ユネスコの世界遺産リストから削除されてしまう可能性があることから、世界遺産になると保存活動が最優先となり、経済効果を生み出す活用には慎重さが求められる。

この点について（一社）南島原ひまわり観光協会の内山会長は「例えば、原城跡を維持するための大切な作業の1つに城内の草刈りがある。現在、その費用は南島原市が負担しているが、これは今後も毎年行わなければならない。このような維持管理費用の確保のためであっても、城内には販売施設1つ作ることができない。他に市が何か収入を得られるような原城の活用方法があればよいが」と語る。

また、行政が「世界遺産だから現状維持が原則」と、資産の維持管理だけでその活用に消極的になると、民間の方も資産を生かしたアイデアなどが浮かびにくくなる。資産の維持管理費用の確保に加え、地元も経済的に潤うような資産の活用ができるようになってはじめて、地域に親しまれる世界遺産となるのではないだろうか。世界遺産のある地域の自治体は、資産の活用においてある程度制限の緩和を、国などに粘り強く働きかけ続けることも肝要と思われる。

おわりに

『潜伏キリシタン関連遺産』は、他の世界文化遺産と異なり集落を中心に構成されている。なかでも本稿で取り上げた「原城跡」と「平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳）」、「平戸の聖地と集落（中江ノ島）」の3資産には教会がなく、教科書に掲載されているが畑と野原が広がる城跡と、山を背にした棚田が広がる集落、それに上陸できない島であり、単に「世界遺産だから」と観光に来た人は、期待外れになることも考えられる。

この新たな世界遺産は、物質的なものではなく、禁教期から現代まで続く潜伏キリシタンの歴史と伝統、すなわち精神的なもの、心のストーリーが世界遺産に認定されたものであり、各構成遺産のガイドを請け負うNPO法人長崎巡礼センター（中村満理事長）の入口仁志局長も「真に

この遺産を理解した人はその奥深さからリピーターとなっている。現に五島列島にある3つの構成資産を全て回ろうと、大阪から五島を3回訪問する人も現れはじめた」と語っている。“その精神面の奥深さをどうやって外部にアプローチできるのか？”という難題に答えが出た時に、『潜伏キリシタン関連遺産』が20を超える日本の世界遺産のなかでも特別な世界遺産として認知されることになるだろう。

この世界遺産は、観る方にもある程度の予備知識を要求するが、単に“観光”で来る人がほとんどであることが想定されるなか、どうすればそのような人たちにも満足して帰ってもらうことができるのかが課題であり、今後も愛され続ける世界遺産となる大きなポイントである。

世界遺産の活用についても、原城跡では5月4日に地元農協が簡易テントを設置して、1本500円の生みかんジュースを作ったところ完売した、とのことである。資産内の変更が難しいのであれば、このような直ぐに撤収可能な簡易テントを用いるなどして物販を行うなど、世界遺産の登録効果を地域へもたらす努力も肝要である。地元住民の暮らしにも寄与する世界遺産が、地域の負の遺産とならずに次の世代まで残るのではないだろうか。

(杉本 士郎)